

生活科

—お母さんに知ってもらいたいこと—

静岡大学教育学部助教授 馬居 政幸

生活科がはじまります

「附属浜松小学校で生き物と遊ぶという活動に参加した時でした。一年生の女の子が、『かたつむりがなめくじになっちゃった。』と、カラが壊れてむき出しになって死にかけているかたつむりを鉛筆でつついている場面に出会いました。私は一瞬どう判断すればよいのかわからなくなりました。しかし、それを見た担任の先生は、静かに女の子とかがたつむりをじっとみつめて、一言、小さな声で言いました。『かたつむりさん死んじゃうよ……かわいそう……』。その瞬間、女の子の目に涙がにじんできました。思わずでた先生の一言が、一年生の女の子の心に小さな生き物の命の重

さを感じさせたのだと思います。そしてその言葉は、その先生の生活に根ざした言葉であったからこそ子どもの心に響いたのだと思います。

生活科の生活とはあくまで子どもの生活です。

しかし、その活動の中で問われるのは子どもではなく教師自身の生活ではないでしょうか。」

これは、昨年三月、『母と生活』と同じ静岡県出版文化会で編集されている『教師の広場』という雑誌の八十三号に掲載していただいた私の文章の最後の部分です。

本誌の読者であれば御存知の方も多いと思いますが、一昨年の平成元年三月に小学校から高等学校までの学習指導要領が改訂されました。その中で特に大きく変わったのが小学校でした。平成四

年度から、低学年（一、二学年）の社会科と理科がなくなり、それにかわって生活科という新しい教科が誕生することになったからです。そして、それに備えて、昨年四月から、少しずつ生活科の実践が小学校で試みられるようになりました。

そのため、新しい教育に挑戦する先生方の授業づくりにも少しもヒントになればと思います、「楽しくなければ生活科じゃない」と題し、『教師の広場』に投稿した小論の末尾が冒頭の文章です。

それから一年。こんどは『母と生活』の編集部の方から依頼をうけました。お母さん方に理解していただけるように、生活科のことを書いてほしいということでした。私は、この一年間の実践経験をふまえ、喜んで引き受けることにしました。理由は三つあります。

一つは、生活科は、「家庭や地域の人たちの理解や協力」がなければ、なかなか進めることができない教科だからです。

二つは、生活科は、学校の「教科が変わる」とただけではなく、家庭や地域を含めた子どもの成長にかかわる全ての「人のあり方」が変わることを願って生まれた教科だからです。

三つは、とりわけお母さん方に、この生活科の

実践に「参加」していただき、あわせて、お父さんを手始めに家庭や地域の人たちに理解と協力の輪を「広げて」いただきたいからです。

したがって、私がこの小論でもっとも述べたいことは次のことです。

新しい教科「生活科」の成功の鍵は

「お母さんの理解と実践」

そして、このような考えを私が抱くようになった原点ともいうべき出来事が、最初に引用した女の子と先生の姿です。そこでその理由をもう少し詳しく、学習指導要領に示された生活科の目標を紹介することから説明したいと思います。

生活科の学びは五感全てから

図1は、改訂された『小学校学習指導要領』に示された生活科の目標です。その内容をわかりやすくするために、(A)から(D)まで英記号をふってしました。ポイントは四つです。

一つは、「(A)具体的な活動や体験を通して、」ということ。生活科という教科の特色を最も示しているのがこの部分です。

これまで小学校では、一人の先生が、教室の中

図-1『小学校学習指導要領に示された生活科の目標』

(A)具体的な活動や体験を通して、(B)自分と身近な社会や自然とのかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、(C)その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、(D)自立への基礎を養う。
(注：英記号と下線は筆者)

で、子どもたち全員に、教科書の内容を、同じように教える、という授業が多かったと思います。生活科は違います。子ども一人ひとりが、自分の五感（見る、聞く、匂う、味わう、触る）すべてを働かせて体全体で“学びとる”のです。

かたつむりのカラは自然に壊れたものではありません。「小さな生き物と遊ぼう」という活動の中でかたつむりを競争させているうちに女の子が壊してしまつたのです。彼女は自分のしたことの意味がわからずとまどっていました。そのとまどう心に先生の言葉と姿がつきささったわけです。先生が黒板や図鑑で説明しても、彼女は小さな生き物のいのちの意味を“感じ取る”ことはできなかったでしょう。自分でさがしてきたかたつむりと遊んでいて誤って踏んづけたからこそ、その意味の重さに涙があふれてきたと思います。

椅子に座って先生の話を聞くことからではなく、実際に五感全てを使って活動し体験する過程で自然に身に付けていくこと。これが生活科の学びの特色です。もちろん、かたつむりのことだけを学ぶのではありません。学ぶ内容もまた、これまでの教科とは大きく異なります。それを示したのが二つ目のポイント「(B)自分と身近な社会や自然と

のかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、」です。

子どもにとっての豊かな生活を

これまで社会は社会科で、自然は理科で勉強してきました。それをなぜ生活科にする必要があるのでしょうか。女の子がかたつむりをみつめるためにおこなったことを手掛かりに考えてみます。彼女はお母さんに公園のあじさいの中にいることを教えてもらい友達と公園に行きました。ところが木がみつかりません。あじさいの花しか知らなかったからです。勇気を出して散歩中のお婆さんに尋ね、何とかかたつむりを見つけた。でもヌメヌメして気味が悪く手で触ることができません。困っていたところ、公園で遊んでいた六年生の男の子が取ってカゴに入れてくれました。喜んで持ち帰ってかたつむりを見ると動きません。心配になってお母さんに聞きましたが、夕飯のしただけで忙しく答えてくれません。ちょうど仕事から帰ってきたお父さんがそれを見て、急いで植木の葉を取ってカゴに入れ、霧吹きで水をかけてくれました。そして、かたつむりを取ってきた理由を聞き、子どものころにかたつむりとどのように

遊んだかを話してくれました。

一年の社会科では、家族という最も身近な社会集団の中での自分や父母の役割、あるいは公園という公共の場の社会的ルールを勉強します。理科では、かたつむりやあじさいの生物や植物としての特性を勉強します。ただしこのような教育は、家庭で手伝いをし、父母の働く姿を知り、公園で自由に遊び、見つけたかたつむりを飼う、といったことを、子どもが実際に経験していることが前提です。経験を科学的な知識と論理で整理し、子どもの考え方や生き方を高めるのが社会科や理科の役割だからです。でも、経験のない子に一方的に教えればどうなるでしょう。成績を上げるために記憶（学力？）することはできても、自分を高め生活を良くするために生かす（知恵にする？）ことは困難だと思いますがいかがでしょうか。

女の子は、絵本やテレビでかたつむりを、あるいは花瓶に生けられたあじさいの花を知っていました。でも、かたつむりのヌメリや花のないあじさいの木を知りませんでした。公園でのお婆さんに尋ねたり、六年の男の子に助けられたり、お父さんから遊び方を教わったのも初めてでした。

彼女にとって、“生き物と遊ぶ”という活動は、

かたつむりや公園の勉強に止まりませんでした。絵本やテレビにより自分では知っていると思っていたことが、いかに本物のいのちある物と異なるか。自分の生活がどれほど多くの人たちに支えられているか。このようなことを、彼女が自分で“気付く”過程でもあったわけです。

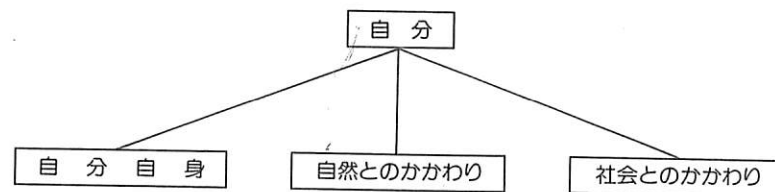
私たち大人は便利で快適な生活のために、人として生きる知恵を学び取るための人と人の間（あいだ）や自然とかわる機会を、子どもから奪っていないでしょうか。この問いへの答えこそが生活科の二つ目のポイント、「(B)自分と身近な社会や自然とのかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに」の意味なのです。社会科と理科にかわって生活科が誕生した理由でもあります。では三つ目のポイント、「(C)その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ」の意味は何でしょうか。

先生と共に子どもを育て

“生活科ネットワークづくり”を

次に図2に示した「生活科の内容選択の視点」の各項目を読んでください。これが様々な活動や体験により学ぶ内容の全体的な“めやす”です。

生活科の内容選択の視点



①健康や安全に気をつけて遊びや生活ができるようにする(健康で安全な生活) ②家族や友だち、先生などと適切に接することができるようにする (身近な人々との接し方) ③公園や乗り物などの公共物を大切に利用できるようにする (公共物の利用) ④生活に使うものを大切にし、計画的に買い物ができるようにする(生活と消費) ⑤日常生活に必要なことを、手紙や電話などによって伝えることができるようにする (情報の伝達) ⑥野外の自然を観察したり、動植物を飼ったり、育てたりするなどして、自然とのふれ合いを深めることができるようにする (身近な自然とのふれ合い) ⑦季節の移り変わりによって、生活が変わることに気づくことができるようにする (季節の変化と生活とのかかわり) ⑧遊びや生活などに使うものを作り、楽しく遊ぶことができるようにする (物の製作) ⑨自分でできるようになったことや生活での自分の役割が増えたことなどに気づき、自分の成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつことができるようにする (自分の成長)
--

⑩日常生活に必要な習慣や技能を身につけるようにする(基本的な生活習慣や生活技能)

一つひとつをみれば、いずれもできて当たり前のことばかり、なんでこんなことを学校でわざわざ「教える」のか、家庭の責任では、と思われるかもしれません。確かに、いずれも家庭で「教える」ことは可能でしょう。でも、①から⑨の文の末尾を見て下さい。すべて「できるようにする」となっています。問題は「できる」なのです。

生活科は「知る」と「できる」がセットになった学習です。だから活動や体験が必要なのです。また、活動や体験の過程は、同時に生活習慣や生活技能を身に付ける過程でもあるはずです。かたつむりを手に入れることが「できる」ためには、女の子はお婆さんや六年生にお礼の言葉を言ったはず。ただし、活動の過程で身に付けるのであって、生活習慣を教えるための活動ではないことも強調しておきます。お礼の練習のために女の子はかたつむりを探したわけではありません。これが三つ目のポイントと同じ趣旨の⑩が、①から⑨を下から支える位置に置かれている理由です。

さらに何をどのように「できる」かは、みんな異なるはずです。同じ一年生でも四月生まれと三月生まれでは「できること」が違って当たり前。みんな一緒ではなく、一人ひとりの良さを見出し

「自分らしさ」を育むこと。これが生活科全体の目的です。図の一番上に「自分」という言葉があり、生活科の目標の四つ目のポイントが「(D)自立への基礎を養う」であることの理由です。

ただしこれらのことがいつでもどこでも「できる」ためには、子どもの生活にかかわる様々な人の助けが必要です。自立と孤立は違います。人とかかわりの中にしか自分らしさを表すことはできません。かたつむりを探しに公園に行った女の子のように、学校でも家庭でもなく、その間(あいだ)こそ子どもの生活と学びの世界です。

友達や先輩や地域の人、みんな子どもが「自ら立つ」ための先生……、とすることができるとどううか。すなわち、「子どもを育む人のネットワークづくり」、これが生活科の目的を達成できるかどうかの鍵です。そして、学校の外で子どもを支える人と人のつながりを最も知っているのは、学校の先生でもお父さんでもないはず。女の子のかたつむりがいる場所を教えたのはお母さんでした。生活科が問いかけているのは、子どもではなく、お母さんの生活ではないでしょうか。

表紙絵 村上 豊 今月の扉／佐々木一宏 9
 グラビア シリーズ静岡県の民話⑩ 『天狗の神かくし』 絵／内藤有実子
 ルボ・ふるさとマップ⑧ 『須津川溪谷・愛鷹山』 編集部
 わんぱくギャラリー⑧ 『友だちの絵』 都田中・鈴木一史

みなみらんぼう 特別寄稿 つる草達の自立

徳岡 孝夫 SPOT マスミ'91 悲劇の民、クルド族

谷 昌恒 心を問いつつて ある日曜礼拝

外山 純子 今月のトピックス 火葬場のじいさん 私の旅③ インド

特集 生活科って、何？

生活科——お母さんに知ってもらいたいこと 静大 馬居政幸 22
 ほか、わたしの町の探検 御殿場・朝日小 赤塩知江 28
 今、生活科に夢中 静岡・南部小 山下由修 30
 タンボ木探検 浜松・曳馬小 高山佳己 32

PART V

胸の中の少年たち たかし カラスの子になる 大竹武士 42
 保健室スケッチ 焼津市立焼津南小 高橋節子 46
 校長先生とつておきの話 我が家の日常語： 富士市立岩松北小 渡邊繁治 48

子育て勉強室

子育て・教育・家庭相談Q&A 訪問販売で購入した学習教材 東部県民生活センター 50
 教師のアンクル 子どもの言葉 韮山町立韮山小奈古谷分校 妹尾 克巳 52
 夢の実現 蒲原町立蒲原東小 山崎 康好 53
 ものほとりよう 富士宮市立富士根南中 和泉真佐子 54
 今思うこと 豊田町立豊田南小 兼子みや子 55
 為せば成る 三ヶ日町立三ヶ日中 田口 博巳 56

静岡県人物往来

河合克敏 夢を追いかけて

子どものホンネ お母さんに言いたい!!

富士市立大淵第一小三年五組 編集部 58

アトリエ探訪 滝沢 清 ATELLIER 柴田 俊 64

母と子のページ

詩とびら／宮西達也 73
 四季のしぜん遊び／おりぞめ&たなばた馬 大箕正之 74
 くつきんぐ・おやつ／桃の味を楽しむピーチ薬 高橋治子 76
 お母さんの算数教室／分けて数え、合わせて数える： 永野昌久 78
 道具のはなし／鉋（かんな） 福元清一 80

暮らしのパレット

歳時記 ☆ アジサイ節供・オカンジャケ 富山 昭 82
 本 ☆ 『PTA歳時記』 河原知恵子 84
 歴史 ☆ うだつ 山下 孝 86
 マナー ☆ 親と子のかかわり 若草の会 88

法月理栄・おっととっこいママ 91
 木の実 90
 伝言板 66

本文カット 村松忠男14 黒田とみじ21・50
 村松麗子66・90 田辺敏行41
 てるしまやすひる42



●このページの右の絵を見て、あそびたいものを当ててくたさい。正解者の中から20名の方に、千円の図書券をさしあげます。×切は7月25日(木)まで。
 あて先▼〒4200静岡市駿府町1の12 静岡県出版文化会(田と生活)フエス係

JULY・7月号

目次

「母と生活」